

注目される サリドマイド療法

新興感染症とサリドマイド

ギラ・カプラン

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：今朝の新聞記事に「米国でフィリピンから輸入したカニクイザル100匹の一部がエボラウイルスに感染し発病した」とありました。このうち50匹は日本に輸入される予定だったということです（1996年7月23日付朝日新聞）。

日本でもヒットした映画『アウトブレイク』は、昨年のザイールでのエボラ出血熱の大流行を予言していましたね。

カプラン：ええ。『アウトブレイク』は、かなりハリウッド的なフィクションを含んでいますが、原作の『ホットゾーン』は面白いだけでなく、読む価値があります。サイエンス・フィクション（科学小説）ではなく、真に科学的で、リアリティがあります。1989年、ヴァージニアの保管所で研究用のサルがエボラでつぎつぎに死に、関係者にも感染する可能性が高かったので、施設内の約500匹が全て殺されました。その事件が題材です。

佐多：エボラやエイズをはじめ、日本で今、大問題になっている病原性大腸菌O-157や狂牛病とCJD（クロイツフェルト・ヤコブ病）との関連、医原性の感染症なども含め、我々は今後ますます新しくて深刻な感染症の問題に直面すると思います。

カプラン：その通りです。今、新興病原菌（emerging pathogen *1）に関する緊急会議が相次いで開催されています。これらの問題が今後、世界的な関心事になっていくことは明かです。全ての感染症が、抗生物質の投与によって治療できるという考えは非常に傲慢（ごうまん）です。薬剤耐性菌（薬剤耐性菌）が つぎつぎに出てくるだけでなく、抗生物質でHIV（ヒト免疫不全ウイルス）などに対処することはできないからです。

佐多：エイズはHIV感染によって、免疫機能が徐々に破壊され、肺結核やカリニ肺炎などの日和見感染症（*2）を起こすわけですが、この状態に先生が実践されているサリドマイドが効くというニュースは非常にショッキングです。とうに禁止されていると思われていたサリドマイドが、また使用されるようになるには、どのような経緯があったのでしょうか。

カプラン：そもそもサリドマイドは、1957年にドイツで開発されました。鎮静や妊娠初期のつわりに効果があったのですが、深刻な副作用がありました。つまり、妊娠中サリドマイドを精神安定剤として服用した女性に先天異常の子供が生まれ、薬が回収されるまでに



Gilla Kaplan / ギラ・カプラン

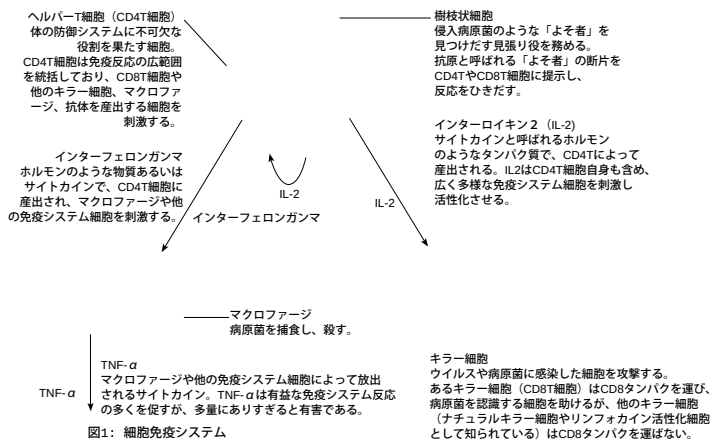
南アフリカ生まれ。イスラエルで育つ。ノルウエーの大学で生物学を学び、1975年、マクロファージ（食細胞）の研究により学位取得。現在、米国ロックフェラー大学細胞生理学免疫学研究所准教授。専攻は免疫病理学。

ヨーロッパで11カ国、アフリカで7カ国など、世界中で多くの悲劇がおきました。アメリカではFDA（食品医薬局）の認可が遅れ、遂に使用されませんでした。その後、マーケットからは姿を消したものの、実はごく限られた範囲での試用は続けられていたのです。

ハンセン（^{らい}癩）病の症状の一つに、ENL（erythema nodosum leprosum 癩性結節性紅斑）という皮膚症状があります。関節炎、神経炎、血管炎、腎臓病、発熱を伴う非常に痛いものです。ある時また使ったサリドマイドが実によく効き、ENLがほとんど消えました。けれども、サリドマイドがなぜ癩の症状を緩和するのか、そのわけはわかりませんでした。ただ経験的に有効だからという理由で、特別の許可を得、癩の患者のためにだけ使用されてきました。

私達はこの複雑なメカニズムを実験室で、試験管の中で研究しました。その結果、1991年、癩患者の血液中のTNF- α （tumor necrosis factor alpha 腫瘍壊死因子アルファ）が、サリドマイドによって抑制されていることを発見しました。TNF- α はマクロファージが病原菌を捕食する時に放出するサイトカインです（図1）。免疫反応に必要な不可欠なものでありながら、多く出過ぎると、発熱や消耗、体重減少などの原因になり、患者が病気をたたかう力をはなはだしく阻害してしまいます。癩病や肺結核、エイズによる日和見感染症の患者の血液中にはたくさんのTNF- α が出ています。その消耗の結果として、患者が亡くなってしまうのだと考えられます。私達はエイズ患者、エイズと肺結核の合併患者に投薬し、良い結果を得ています（図2）。

人間はエイズウイルスと共存していかなければならないわけですから、サリドマイドの投与によって、病状を緩和し、寿命を少しでも延ばし、QOL（生活の質）を改善できれば、一歩前進と言えるでしょう。**佐多：**そうですね。ところで、先生はなぜハンセン病の研究に興味をもたれたのですか。



カプラン: 私はもともと細菌生理学を学び、特に細胞内寄生 (※3) に興味をもっていました。寄生菌と宿主との関係を調べるうえで、鼠癩菌というマウスの抗酸菌が病巣のどこにいて、どのように肉芽腫を構築していくかなどを電子顕微鏡を使って観察していました。癩には、癩種型、結核型、ボーダーライン型などいくつかの型があり、その型によって、病巣の細胞の構造や活性化状況、免疫状況などがはっきり違います。そのため抗原に対する免疫反応の仕組みが非常に解かりやすいのです。しかし、マウスの癩とヒトの癩とは全く違いますので、ロックフェラー大学留学後は、ヒトの癩を、南アフリカ、タイ、フィリピンなどでも研究し、14年間続けています。

佐多: ハンセン病の研究の中からサリドマイドの有効性のメカニズムが解明されていったわけですね。今後は、ハンセン病、肺結核以外の病気にもサリドマイドが使われるのでしょうか。

カプラン: TNF- α が出るほとんどの病気にサリドマイドは有効でしょう。今私達は3つのプロジェクトを進めています。

ひとつは、局所の炎症が生体に与えるダメージをどのように抑えるかということです。例えば結核性の髄膜炎です。現在アフリカのある地域では子供人口の約1%が髄膜炎に罹っています。病気が進むと、患者の髄液の中に炎症性の細胞やリンパ球などが集まって来てしまい、重篤になって死んでしまいます。それをサリドマイドを使って抑えられないかという研究です。また、エイズ患者がサイトメガロウイルス肺炎やカリニ肺炎などを合併したとき、血液中にTNF- α がたくさん出てしまうためにエイズがさらに悪化するというメカニズムを抑えられないか、という研究です。

第2には、サリドマイドのアナログ (類似体) を見つけて、TNF- α 抑制により効果的な薬を開発すること。

第3には、研究目的にサリドマイドを使うことです。例をあげますと、関節リウマチの病巣部にはインターロイキン1、TNF- α など、いろいろなサイトカインがでます。そこに試験的にサリドマイドを使うことによって病態がどう変わるかを調べ、病態とサイトカインとの関係を研究します。

佐多: サリドマイドがエイズに有効という情報がエイズコミュニティに流れた結果、ボランティアやHIV感染者自身が、サリドマイドをブラジルから個人輸入し配付しているそうですが。



カプラン: 不法に薬を入手し個人的に使用することが多くなると、私達は臨床試験のデータを収集分析できなくなります。それで、エイズコミュニティに働きかけて、サリドマイドのモニタリングの必要性を理解してもらうようにしています。

いずれにせよ私は免疫学者ですから、やはり主要な興味は免疫反応です。しかし、多くの医師や生理学者がフィールドワークに従事しながらも、病原菌の分子生物学や遺伝子研究に目をうばわけているとしたら、それは大きな問題です。私達にとって、感染症の患者と病気そのものを理解することが、最も重要で興味深いことです。

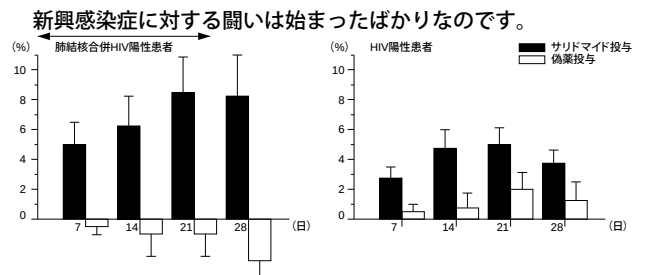


図2: サリドマイド療法の効果 体重増加
Journal of Acquired Immune Deficiency Syndromes and Human Retrovirology
Vol.11, No.3, 1996

※1: ウイルス出現の最も重要な原因はウイルスの突然変異ではない。人間の作りだした条件によって、すでに存在しているウイルスが地理的あるいは生物種間の境界を越えることである。すなわち、人間や動植物の世界的な大移動、急激に進む都市化、地球の温暖化、農業習慣、水の管理、現代医学などによる。(『ウイルスの反乱』青土社1996)

※2: 感染抵抗力の低下時、非病原微生物による感染がおこること。エイズ、白血病、悪性リンパ腫瘍、癌、糖尿病などの患者、免疫抑制剤、抗癌剤、放射線による療法の際、および長期抗生物質投与による菌交代症などにもなる。

※3: ウイルスの急性感染には通常、インターロイキン、サイトカインの増大、特異的な抗体の放出、ウイルス・タンパク質の一部が感染細胞の表面に姿を現すなどのサインが出る。しかしウイルスと細胞、つまり寄生物と宿主とが特殊な共生関係にあると、免疫系から隠れた状態となり、これらのサインが現れずに、ウイルスが何年も細胞内で生き続ける。

髄内釘による 「最小侵襲手術手技」

鈴木 一太

—骨折治療の現状と今後の展望—

スポーツ選手の骨折は職業病、といわれるほど。先8月初旬にはヤクルトのプロス選手が「右腓骨疲労骨折」で全治3週間と診断された。同じ頃、サッカーの福田正博選手（浦和レッズ）も「足関節の脱臼骨折」で、プレー復帰には4カ月を費やすと報道されていたのは、記憶に新しい。

スポーツでの骨折に限らず、一般に骨折治療はかなりの時間を要するものである。が、このところ、「手術すれば2、3カ月、しなければ半年かかる」という声をよく耳にする。以前に比べて、ずいぶん完治の時間が短縮されているが、治療法がどう変わってきたか。長年現場で臨床に当たられている鈴木一太副院長（藤沢市民病院）に、骨折治療はその流れの中でどう進歩してきたか、うかがった。

「骨折をした箇所によって、かなりの相違はあります。が、大腿骨という人体で一番大きな骨を骨折して完治するまでの例をとってみると、昔は手術なしで保存的な治療でした。ご承知のように手術なしとは、ギブスを数カ月間巻いたり下肢を牽引して治療する方法です。仕事に復帰するまで1年近くかかっていたわけです。最近よくいわれるクオリティ・オブ・ライフ（生活の質）を高めて、患者さんの日常生活に不自由なく治療を受けさせたいという風潮もあって、できるだけ早期に社会復帰できる研究が進められています。現在、麻酔や抗生物質の発達などもありますが、手術は大きな侵襲を加えないで最小の侵襲による治療法がより多く選択されるようになりました」

リハビリ期間が短縮できる骨折手術

骨折の治療は、整備（ズレている骨をただす）、固定（整備した骨が着くまで固定する）、後療法（リハビリテーションを初めとした機能障害を残さないための治療）の3段階からなっている。

従来の手術しない方法だと、骨折した箇所の上と下の関節を含めてギブスで固定するため、固定期間が過ぎると関節の動きが悪くなったり筋力が落ちたりして元通りに回復させるためには長期間のリハビリテーションが必須である。

大きな骨の骨折では患肢の腫れがひくのが2～3週後で、それま



鈴木 一太 / すずき・かずひろ

1931年、東京生まれ。58年、横浜市立大学医学部卒業。59～66年、米国コーネル大学等に留学。横浜市立大学医学部講師、藤沢市民病院整形外科医長等を経て、現在藤沢市民病院副院長。

では牽引などを行い、後にギブスを巻くことになる。しかもレントゲンを定期的にとり、仮骨が出現するまで、なかなか体重をかけさせないよう指導する。米国のサルミエント先生が提唱した『PTBギブス』など、ギブスの巻き方が改良され早期に体重がかけられるようになったが、それでも時間は要するものであった。

「手術することによって、後療法期間も短くて済みます。しかも、痛みがなくなったらしだいに体重をかけることができます。その痛みも骨折を整復し、しっかり固定すればさほど長引かないで歩行訓練が始められます。

手術にしても、長管骨の大腿骨や下腿の骨（向う脛）は今から10数年前は、骨折部分を大きく開いてプレートやスクリューで固定する手術法がよく行われていました。最近、髄内釘（ネイル）を使って固定すると『最小侵襲手術手技』といって局所の損傷をなるべく小さくして、しかも良好な固定性が得られる方法が発達してきました。これですと、強固に固定して痛みが取れた時点から、関節を動かしながら松葉杖をついて歩くことができるのです。それも、たかだか1週間ぐらいでしょう。

そういう意味で、主に若い層から壮年層の長管骨折に対しては、髄内釘は非常に良い方法です」

骨折治療機転を阻害しない画期的な髄内釘

髄内釘は、文字通り骨折した骨の骨髓内に人工の長い金属製釘（ネイル）を挿入して固定する方法である。この髄内釘法は戦後まもなくから開発されてはいたが、当時は強力な固定をするために髄内をリーマーで内部をえぐって太い髄内釘を挿入していた。

「骨折が治癒する過程で、治癒機転というものがあります。つまり、骨が治りたいという神様から授けられた力が働く時でしょうか。それを、いかにしてうまく利用し、阻害しないかが重要ですが、一時盛んに行われていた骨折部を開けて強力なプレートを、スクリューのようなものでとめる方法は、強力な固定は得られるが、骨折部を展開するので骨折治癒過程に必要な血管、骨膜などを損

傷し、自然に備わった骨折治癒機転を阻害するという意味ではマイナスです。

その後、髄内釘は材料や形状などがいろいろと研究されていきました。まさに、オーソフィックス社のティピアル・ネイルは、細くても横止めがあるので、かなり強力な固定が得られてしかも骨折治癒機転を阻害しない、という非常に優れた方法です」

従来の髄内釘は、前記のようにリーマーで血管を破壊する他、いくつかの問題点があった。固定力が必ずしも強くない、回旋変形が防止できない、手術が長時間に及ぶことなどである。また、医師側の問題として、手技熟練までに時間がかかることや長時間のX線被爆などがある。

「骨折部を開けないため、レントゲンTV（イメージ・インテンシ・ファイヤー）を駆使して手術ができるようになって、この種の手術が発達し始めたのが約25年前でした。さらに、髄内をリミングせずネイルを挿入し、上・下端で横止めのスクリューで固定するというロッキングネイルが開発されて、長管骨骨折の治療が大きく発展しました。

レントゲンなしでも刺入点の近いところは、どの器械でもだいたい横止めのスクリューを入れやすいようです。が、刺入点から遠いところにも横止めスクリューを入れるため、そこまで届くターゲティング・デバイスは、これまでなかなか開発されませんでした今回のオーソフィックスの髄内釘システムが初めてでしょう。遠位部で操作ができるということは、メカニカルにいつてしっかりしていることで、非常に操作が簡素化されました。しかも、骨髓の中をえぐったりしませんから、骨折治癒機転を阻害せず固定性も良く、骨の癒合もいい。手術後、数日から1週間で歩行できますね」

骨折手術と今後の問題点

「ターゲティング・デバイスが遠位部にも使えるというのは、現在のところ脛骨骨折の手術です。大腿骨にも使えるようにいま開発中だと聞いていますが、早くできることを期待しています。

骨折治療にとって大切なことは、どうして骨折が治癒していくかなどの基礎研究を十分した上で、それを実地応用していくこと

です。今年『日本骨折治療学会』を私が主催させていただきましたが、その主なテーマは、

- 1 骨折治癒の基礎的研究とその臨床応用
- 2 社会的問題となっている老人の骨折
- 3 人生を楽しむ時代のスポーツに関連した骨折

基礎研究でももの本質を見極めて、末梢的なテクニックばかりに走らない、いろいろな科学がお互いに影響しあってさらに研究を進めることができればと思います」

高齢化社会と骨折治療

骨折の原因は年齢層によっても異なるが、一般に交通事故や産業災害など大きな外力によることが多い。ただ、前記にもあるように、高齢者の骨折は寝たきり老人になりやすいので大きな社会問題になっている。

「高齢者に起こりやすい骨折は、大腿骨頸部（もものつけ根）、手首の橈骨末端、肩の上腕骨の頸部などです、なぜなら、骨粗鬆症が根底にあって骨が脆く、軽微な外力で折れやすくなっているからです。高齢者は、蒲団の上で転んでも骨折します。

日本女性の閉経平均年齢は50歳で、65歳以上の女性の半数が骨粗鬆症といわれています。男性の場合、人口の半数が骨粗鬆症になる年齢は80歳。それだけ、女性ホルモンに骨形成が左右されるため女性に多いわけです。

骨粗鬆症によって起こる大腿骨頸部骨折の場合、30～40年前は下肢を牽引して安静にしながら骨癒合を期待する保存療法がしばしば行われてきました。最近は積極的に手術が行われるようになって、当院での治療法を例にとると手術する平均年齢が80歳、骨折患者さんの90%が手術しています。

現在寝たきりの方が日本に100万人といわれていますが、そのうち骨粗鬆症など骨折で寝たきりになった方が3分の1と推定されています。そうならないために、いかに早期離床、早期歩行をしてもらうか、その手技をどうとるかが、整形外科医にとっていま大きな課題になっています」

感染と人間（4）

中田 光

若い女性を診たらまず妊娠を疑え？

その日は丁度当直にあたっていた。夜の回診と点滴に病棟へ行くまでの間、束の間の平和な時間があった。ゴルフ談義に花を咲かせていた先輩の先生方が家路に向かい、残されたT社病院の医局で、私は大きな窓をいっぱいに関け放って、4月始めの冷気を浴びていた。卒業して3年が経ち、日々の臨床に喜びを感じる余裕が出てきた頃だった。苦しかった2年間の研修医時代を思い出しながら、心に溜まっていたもやもやを深呼吸とともに一気に吐き出したいような、そんな気分になっていた。

遠くで救急車のサイレンがなっているなど思ったとたん、医局の電話がけたたましく鳴った。27才の女性。T社内で腹痛を起こし、救急車でこちらに向かっていているという。時刻は5時半を少し回ったところだった。運ばれてきた患者は顔面蒼白で、下腹部を抑え歩くのもやっとだった。救急車の中で2度嘔吐したという。腹筋は緊張し、左下腹部に強い圧痛があった。急性腹症（外科手術が必要な腹痛）かもしれない。点滴を刺しながら、『若い女性を診たら、まず妊娠を疑え』と救急の授業で習ったことを思い出した。子宮外妊娠か？生理のことを尋ねると何時だったのか思い出せないという。いよいよあやしいと思い、婦人科の先生を呼ぶべきかどうか迷っていた。

それが、誤診であることに気付くまで3分とかからなかった。2台目の救急車が本社から到着し、今度は男性ばかり5人だったからだ。みんな腹痛と悪心、嘔吐があり、何人かは水様性の下痢が始まっていた。問診で一致していたのは昼食に社員食堂でカニピラフを食べていたことだ。嫌な予感がした。T社は改築が済んで間もない7000人も働いている巨大ビルである。T社は3ヶ所に病院を持っているが、地理的に一番近いから患者はこの病院に殺到するだろう。一体何人ぐらい来るのだろうか？当直の事務員からT社に連絡してもらい、カニピラフはどのくらい売れたのか問い合せた。答えは700食で、ほぼ完売だったという。どうしよう-----私は頭の中が白くなりかけていた。

富谷先生の約束処方箋

婦長はまだ帰宅前の医師の自宅に連絡をとり、

再出勤するように頼んでいた。幸い、病棟には研修2年目の野田君、富谷君、田城君の3人が残って、カルテを書いていた。彼らを集めて4人で対策を練った。その間も患者はどんどん搬送されてきた。時刻は6時を過ぎた頃だった。とにかく、先輩の先生方が病院へ戻るまでこの4人でなんとか持ちこたえなければならない。神戸の震災の時もそうだったけれども、どんな非常時にも冷静に事態を判断し、的確に行動出来る人はいるものである。3人の中で富谷君はそんな人だった。彼は患者を（1）軽症、（2）中等症、（3）重症に分けることを提案し、5分と経たないうちに次のような約束処方箋を作り上げた。

- （1）タンナルビン1.5g、アドソルビン1.5g（以上止痢剤）、ラックB1.0g（整腸剤）、以上は1日3回に分けて服用、ブスコパン2錠（鎮痙剤）頓服で腹痛に使用する。
- （2）（1）に加えてアスバラK（カリウム補強剤）入り乳酸加リンゲルの点滴
- （3）アスバラK入り乳酸加リンゲルと抗生剤ホスホマイシンの点滴、ブスコパンの筋注

この約束処方箋は婦長によって早速コピーされ、看護婦と薬剤師に配られた。この頃には婦長が召集した非番の看護婦達が続々と姿を現わした。中には湯上がりの髪を乾かす間もなく、濡れた髪にナースキャップを被って駆け付けてくれた看護婦もいた。私たち4人は持ち場を決めた。野田君は病院入り口受付付近にいて、来院する患者の容体のみて簡単な問診をして、重症度を決め、（1）、（2）、（3）と書いた札を渡す。看護婦がその札を見て患者を誘導し、処置する手筈だった。富谷君は外来診察室にいて（2）の中等症の患者を集めて寝かせて治療する。私は病棟に張りついて（3）の重症患者を治療し、田城君は各持ち場の間を行き来する連絡役を引き受けてくれた。（1）の札をもらった患者さんには気の毒だけど、待合室のソファに座って頂き、看護婦から薬をもらって服用して、腹痛と下痢が軽快したらなるべく帰ってもらうことにした。大事なことは、野田君は患者の重症度を決めるだけで治療には加わらないこと、また、他の3人は絶対に野田君が決めた重症度に異議を唱えずに行動するという点だった。後から考えると、



写真1: T病院時代「くらしの博物館」の取材。後方は川津佑介さん

中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。米国ニューヨーク大学ベルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手。

この治療方式と即席の約束処方箋はなんと威力を発揮したことか！同じカニピラフを食べても全く発症しない人もいて、症状にはかなりの開きがあった。来院する患者全てに点滴をしていたら、とてもさばき切れなかつただろう。

病棟には、重症患者が次々に運ばれてきて、空きベッドはすぐにうまってしまった。私はベッドの間を走り回って、患者を診て点滴を射っていった。水様性下痢がひどい患者は急速な脱水のために頻脈となり、血圧が低下して、点滴が入りにくかった。急速な電解質の喪失によって、心電図上U波（血液中のカリウムが低下している時にみられる）が出現している患者もいた。悪寒に震えている患者がいるかと思えば、意識がぼーっとしてベッド上で失禁してしまう患者もいた。しかし、幸いなことに点滴を2本、3本と終わるうちに皆顔色が良くなり、ブスコパンの筋肉注射がよく効いて腹痛が治まっていった。9時を回ったところで、漸く応援の内科の先生が来てくださり、私は持ち場を離れ、外来の富谷君の応援に回ることができた。

『風と共に去りぬ』を彷彿とさせる光景

外来と待合室は患者と看護婦でごった返していた。外来診察室のベッドは点滴を受ける患者で一杯になり、仕方なく待合室のソファを処置室や廊下に移動させてそこに寝かせて点滴を射していった。軽症の札をもらった患者は座るソファがなくなり、床に座って投薬を待つ人もいた。一方では、救急車が病院の玄関に次々と横付けになり、中から4、5名の患者が雪崩をうつ様に出でてきた。そのまま、玄関にしゃがみこんでしまう人。受付を済ませてくださいという事務員を突き飛ばし、トイレに駆け込むOL。こうした光景に私は思わず、映画『風と共に去りぬ』で敗走する南軍の兵士たちが野戦病院でうめき声をあげているあの有名なシーンを思い出してしまった。

10時近くになって院長先生や内科部長先生が現われ、どこからか情報を聞き付けてやってきた新聞記者のインタビューに応じていた。カニピ



写真2: 左から田城君, 野田君, 富谷君

ラフを社員食堂で製造販売した会社の幹部だろうか、青ざめた顔つきで可哀相になるくらい恐縮して謝って回っていた。12時頃から、重症の患者は途絶えて、事態は次第に沈静化していった。翌朝まで食中毒患者の来院は続いて総数は二百数十名に達した。患者の便培養から、腸炎ビブリオ菌が検出され、同じ菌がカニピラフに入っていた生ハムからも検出された。この菌は日本人の生魚を食べる習慣から、「腸炎ビブリオ菌による食中毒は日本に多い」と英語の内科書に書かれているくらいかつてわが国で夏期に起こる食中毒の代名詞のように思われていた。しかし、その後の食生活の変化からだろうか、それとも魚介類の食品衛生管理が向上したためだろうか、90年代に入って急速に減少し、王座をサルモネラ菌に明け渡している(表1)。

結局、450名が発症したその年で一番大規模な食中毒事件だった。しかし、その割には業者は一週間の営業停止を受けただけで、何故生ハムが通常魚介類から検出される菌に汚染されていたのかなど、究明されなければならない点はうやむやなままにされた。後日談で、院長先生はその数日後、本社に呼ばれてお叱りを受けたという。カニピラフの外食会社がT社と関係が深かったために、事件を明るみに出したくなか

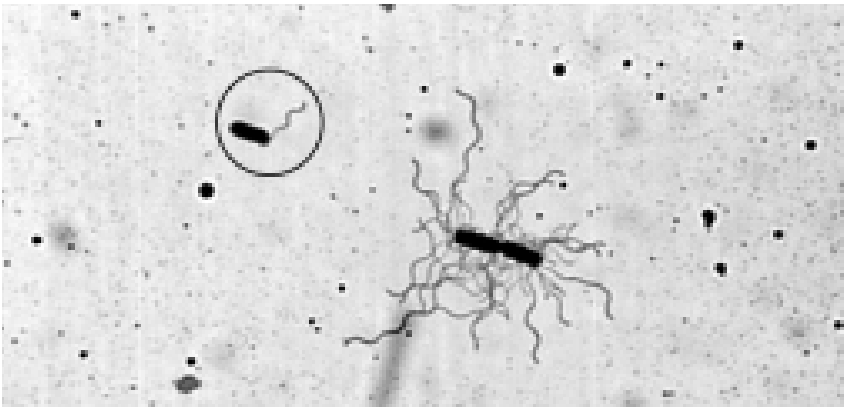


写真3: ビブリオの顕微鏡写真(円内)。右方は大腸菌(東大医科研・安達氏提供)

ったのだろう。しかし、一晩中、救急車が来院していたのだから、事件をひた隠しにすることなど出来るはずもなかった。ましてや医者も看護婦も薬剤師も検査技師も不眠不休で働いていたのだから、マスコミに連絡している余裕などなかった。スタッフを^{あつ}勞う言葉もなく、ただただ官僚的な本社の態度に富谷君と私は憤ってしまった。

経済効率と安全性のアンバランス

以上が、昭和61年の春にT社で実際に起った食中毒事件の一部始終である。実は、この事件にはエピソードがある。私がT社病院に赴任したとき、病院食はとても美味しかった。熟練した栄養士さんがつくる心尽くしの食事、当直で検食する度に感心していた。ところが、この前年に事件を起こした外食会社が本社の後押しで、病院食に乗りだし、あっと言う間にレトルト食のような病院食に切り替わってしまった。我々は皆、本音は反対だったのだが、年商何十億というこの会社の規模に、そんな大きな会社なら安心だろうと思って本社の説得に応じてしまったのだ。しかし、規模が大きいということは安全を意味しないことをこの事件で思い知らされた。不幸中の幸いだったのは、事件の日、

病院のメニューにはカニピラフはなかったことだった。腸炎ビブリオ菌(Vibrioparahaemolyticus)は耐熱性溶血毒を産生するが、それは溶血を起こす他に心臓毒性も持つ。もし、入院中のお年寄りや心不全の患者さんが被害に遭っていたら、死者が出ていたかもしれない。

わが国における食中毒事件は近年、発生件数こそ減少したが、患者数は減っていない。話題になった病原性大腸菌にしても毎年数千名の患者がいるのである。つまり、一件あたりの規模が拡大しているのだ(表2)。このことは、T社の事件でも今夏の堺市のO-157による食中毒事件でも顕著だった。半完成品の食材が大量に工場で製造され、沢山の学校や病院に配られる。堺のある学校では食材は、冷蔵庫内ではなく、蒸し暑い部屋に放置されていたという。徹底した分業化によって、工程が増える分だけ、総和として安全性は下がるだろうし、個々の分業に携わる人々の責任感が希薄になるかもしれない。経済効率と安全性の歯車がかみ合わないところから食中毒は発生するのではないだろうか？

(つづく)

年次	腸炎ビブリオ	サルモネラ	ブドウ球菌	病原大腸菌	ボツリヌス菌
1984	8,222	2,107	4,813	6,151	44
1985	14,006	2,412	4,968	3,899	1
1986	12,138	2,363	3,855	2,141	0
1987	8,149	3,600	3,616	1,616	0
1988	5,231	14,507	3,168	1,756	4
1989	9,636	6,750	3,224	4,736	6
1990	9,128	8,303	4,104	6,135	0
1991	8,082	10,234	2,453	4,445	3
1992	2,845	11,431	1,541	5,230	0
1993	3,124	6,954	1,349	5,524	5

表1: 最近10年間のわが国の細菌性食中毒の主な原因菌別患者数(医科細菌学より)

年次	事件数	患者数	り患率 (人口10万対)	患者数 (1事件当たり)	死者数	死亡率 (人口10万対)
1955	3,277	63,745	71.4	19.5	554	0.6
1960	1,877	37,253	39.9	19.8	218	0.2
1965	1,208	29,018	29.5	24.0	139	0.1
1970	1,133	32,516	31.3	28.7	63	0.1
1975	1,783	45,277	40.4	25.4	52	0.0
1980	1,001	32,737	28.0	32.7	23	0.0
1985	1,177	44,102	36.4	37.5	12	0.0
1986	899	35,556	29.2	39.6	7	0.0
1987	840	25,368	20.7	30.2	5	0.0
1988	724	41,439	33.7	57.2	8	0.0
1989	927	36,479	29.6	39.4	10	0.0
1990	926	37,561	30.4	40.6	5	0.0
1991	782	39,745	32.0	50.8	6	0.0
1992	557	29,790	23.9	53.5	6	0.0
1993	550	25,702	20.6	46.7	10	0.0
1994	830	35,735	28.6	43.1	2	0.0
1995	699	26,325	21.0	37.7	5	0.0

表2: 食中毒事件数・患者数・り患率・死者数・死亡率の年次推移

女性のみにある非生殖期：神の摂理か？ 非合理か？

石塚 文平

更年期とホルモン補充療法（上）

人は誰も老いていくもの、今や社会の中核を形成している団塊の世代も「少年老い易く学成り難し」を実感する年頃になった。同時に団塊の世代の女性は更年期を迎えつつある。これは日本の社会にとって画期的なことであり、日本にかつてない数の更年期後婦人が存在する時代が到来する。

女性は男性よりも長生きするが、こと生殖機能に関しては男性より極端に短命である。男では程度の差はあれ一生精子の生産が可能であるのに対し、女性では性腺（卵巣）の機能は通常50歳前後で停止する。例外をのぞいてこの年限は驚くほど一定しており、49歳から51歳にほとんどが集中しており、歴史的にも記録に残る限りあまり変化が見られない。

そのため女性にとって平均寿命が延びることは、すなわち閉経後の時間が延びることを意味している。この男女差は性腺の成り立ちの根本的な違いに起因している。

性腺機能の男女差

性腺とは生殖機能の中心となる器官のことで、男で言えば精巣、女では卵巣がこれにあたる。性腺の機能は大きく分けて2つあり、1つは配偶子を作ることで、もう1つが性ホルモンを分泌することである。

配偶子の作り方には男女で根本的な違いがある。精巣は思春期以降、毎日精子を億の単位で作し続ける。一方の卵細胞の形成はその女性が生まれる前、すなわち胎生7カ月にすべて終了しており、それ以降は新しい卵子が作られることはない。これらの卵子は第2減数分裂のprophaseで停止したまま保存されるが、胎生7カ月の700万個から一生を通じて減り続け、出生時には両側卵巣を合わせてすでに100万個ほどに減る。思春期にいたると男女とも脳下垂体より性腺刺激ホルモンの分泌が始まり、男性では精子の生成とアンドロゲンの分泌が、女性では卵胞の発育とエストロゲンの分泌が始まる。女性が一生に排卵する卵子の数は1年12個、35年間としてもせいぜい400個ほどで、あとの数10万個の卵は結局排卵されないわけだが、年とともに消滅しその数は減少し、50歳前後には0になる。卵胞数が消滅するだけでなく、残った卵胞の性腺刺激ホルモン（ゴナドトロピン）に対

する反応も低下するため、エストロゲンの分泌も急激に低下する。すなわち、男性の精巣が精子の製造工場なのに対して、女性の卵巣は卵子の貯蔵庫であり、卵子のストックは50歳前後には底をついてしまう。そこで、女性の一生には生殖をしない時期、非生殖期が存在することになる。更年期とは生殖期より非生殖期への移行期と定義される。言い換えれば、卵胞の発育がなくなりエストロゲンの分泌が低下しつつある時期とも定義し得る。非生殖期はまた低エストロゲン期でもある。

こうした仕組みの生理的意義はまったく解明されていないが、生殖機能の中心は女性であるので胎児をはらみ、産む女性側の環境が劣化してから妊娠を防止するという意味あいがあるのかも知れない。一方の男性はもともと生殖に関しては脇役にすぎないのでそうした制限が設けられなかったとも考えられる。良い受精卵、子孫を残すために、精巣が精子の製造工場なのに対し、卵巣は卵子の貯蔵庫である必然性があったのであろうか？ 体外受精などの補助的生殖技術が進歩した現在でもまだ理解されていない。今後の生殖医学の大きなテーマである。

女性をめぐる社会的変化と更年期

ここでは更年期の問題と更年期以降の問題をはっきり分けて考えなければならぬだろう。更年期は生殖期から非生殖期への過渡期であり自律神経失調症である更年期障害が存在するものの、身体的にはさして重大な問題ではない。更年期障害とはエストロゲンの血中濃度の低下に伴う視床下部血管運動神経中枢の機能失調に起因する「のぼせ感」を主体とする自律神経失調症を言う。現代の女性において更年期障害が問題となるのはちょうどこの時期が女性が生き甲斐を喪失しやすい時期と重なることに起因していると考えられる。

つい最近まで人生は50年で、少なくとも平均年齢でみれば女性が更年期を過ぎて長く生きることにはなかったことになる。大多数の女性が更年期を過ぎて生きる時代は歴史的には、まだほんの短い期間でしかない。閉経年齢は歴史的にほとんど変わらないため、女性の寿命が延びることは、すなわち、閉経後の時間が延びることになる。現在の女性は人生の1/3を閉経後の時



石塚 文平 / いしづか・ぶんぺい

1946年、東京生まれ。71年、昭和大学医学部卒業。慶応義塾大学病院産婦人科勤務、カリフォルニア大学サンディエゴ校生殖医学研究所留学を経て、現在、聖マリアンナ医科大学産婦人科助教授。

間として過ごすことになった。それに加えて更年期の問題に影響をあたえているのは女性のセルフイメージの変化である。

かつての女性は50歳を越えれば「おばあさん」であった。家族形態も大家族制で家庭内での地位も居場所も確保されていた。戦後の核家族化は更年期以降の女性から、おばあさんとしての家庭内の居場所を奪ってしまった。衛生状態や栄養の改善によって現在では閉経後女性が格段に健康になり、核家族化に加えて社会進出も進んだ今、イメージとして閉経後女性が若さを強調せざるを得なくなったことも見逃せない。40代後半から50代前半にかけては男女共通に成人病の入り口にさしかかる年齢である。ほとんどの人は初めて老化を自覚する年齢である。老眼はその顕著な現れであり男女共通に感じる老化のシンボルともいえるであろう。40歳前後にはほとんどの人が老眼を自覚する。その他、肩こり、腰痛と言った様々な不定愁訴も経験するようになる。女性の場合は、それに加えて閉経と言う決定的な老化のシンボルを迎えることになる。また、女性はお化粧のため毎日鏡に向かう。それは顔の一本、一本のしわと毎日対峙することを意味し、男性より老化を自覚する機会を得やすい。しかも、今日の更年期の女性はかつてと異なり、「おばあさん」になる心の準備も無く、また、社会的条件もないのである。つまり、セルフイメージとしては若いままなのに、身体的に老化を自覚するギャップが現代の更年期女性の問題といえる。

現在の更年期女性の問題としてももう一つ重要なのは、子どもが自立してゆく年齢がちょうど更年期の年齢に合致することである。すなわち、30歳前後で産んだ末子が高校を卒業する年齢が40代後半になる。現在更年期を迎えつつある女性は自分のキャリアがあってもそれを諦めて家庭に入った場合が多く、その後は家族の世話、特に子育て、それも受験戦争にエネルギーを費やすのが典型的な形態であった。ちょうど、更年期の年齢に子供の親離れが始まり、夫はこれ

標的臓器	症状・疾患
1 中枢神経系	hot flush ○ 精神症状 ○
2 泌尿・生殖器系	外陰・膣萎縮 ○● 膀胱炎様症状 ○● 尿失禁 ○● 子宮下垂 ○●
3 循環器系	動脈硬化 ● 冠疾患 ●
4 骨	骨粗鬆症 ●

○ エストロゲン欠乏による急性症状
● エストロゲン慢性欠乏に起因する症状
○● 上記2つの中間に現れる症状

表1:エストロゲン欠乏により起こり得る症状・疾患

までの例では高度成長期から、バブル経済期にかけて企業戦士であり、最も社会的に忙殺されて、妻とのギャップが最も大きい時期である。妻は生き甲斐を喪失しやすく、また孤独である。こうした状況で起こる心身の不調がempty nest syndrome (空の巣症候群)と呼ばれる。日本ではこれが親が子離れ出来ない事情と結びついて、戦後の一般的な日本人女性の生き方と密接に関連した更年期の問題点といえる。

更年期障害とはエストロゲン低下に起因する自律神経失調症にこれらの社会、心理的な問題が加わって形成される一種の心身症であると言える。更年期障害自体はエストロゲン分泌の低下に基づいた自律神経機能失調であり、生命の危険を伴う状況でもない。また、その発現には個人差があり、40%の女性はとくに症状無くこの時期を過ぎてしまう。私たち聖マリアンナ医科大学の更年期外来（アゼリア外来）での調査でも、更年期外来を受診する女性と同年令の一般非受診者の比較で、更年期外来受診者は更年期指数（Kuppermann指数）が高いのは勿論、ストレスの主観的評価が高く、加齢に伴う情緒の安定度が低く、友達の数が少なく、趣味に乏しいということが明らかとなった。また、受診群においては更年期指数と生き甲斐感、情緒の安定度に有意な負の相関が認められた。つまり、更年期外来の受診者は非受診者に比べ社会的、心理的な問題点を多く持っている人達であるといえる。

以上、更年期障害とは身体的に言えば、エストロゲンの減少に起因する自律神経失調症であるがその症状の形成には多くの場合心因の関与が大きい。仕事や趣味に打ち込む女性に更年期症害を訴える例が少ないことも事実である。すなわち、更年期障害の解決策は生き甲斐を持つことといえる。この点に関しては堂園涼子著『更年期かしら』（主婦の友社）を参照されたい。

しかし、社会的、医学的に今後より重要な課題となるのは、むしろ更年期以降の女性のwell beingの問題であろう。次章ではエストロゲンの作用のなくなった更年期以降の女性に独特の健康上の問題とその対策について述べる。

女性ホルモンと女性の健康（ホルモン補充療法の効果）

女らしさは必ずしも性ホルモンの作用だけによって形作られるものではない。精神的な女らしさとは胎児期に形作られた基本的性質を基として幼少期に形成される性格およびその後の経験、修練により磨かれる人格が総合されたものであり、閉経により女性が失うものは女性ホルモンの生物学的作用に過ぎない。しかし、エストロゲンは女性の健康を色々の面で保護していることが最近解明されてきた。その意味で更年期以降の女性はエストロゲンの保護を失った状態にいとる。

更年期以降女性の健康上の問題は起こる時期により3つ分類される（表1）。閉経前後、エストロゲンの減少が始まると最初に起こる症状は女性ホルモンの減少自体に起因する更年期障害であり、その中心は血管運動神経の失調に基づく「のぼせ感」、いわゆるhot flushである。頭重感などのある種の前駆症状を伴うこともあり、昼夜、外界の温度などの外的環境とかかわりなく、数時間に一回おこる。昼夜関係なく起こるため、睡眠中には目が覚めてしまうことが多く更年期に不眠の訴えが多い一つの原因になっている。HRT（ホルモン補充療法）は数週間以内にhot flushの発現を有意に減少させる（図1）。

中期的な問題としては膀胱炎や萎縮性膀胱炎などの泌尿、生殖器系の症状がある。これらの症状は閉経後しばらくして、ふつう50歳代に現れる症状である。膣粘膜は菲薄になり、弾力を失い傷つきやすくなる。膣自浄作用が低下して感染に対する抵抗力が弱まる。こうして、いわゆる萎縮性膀胱炎の症状が出現する。閉経後の年月がかつてなく長くなり、核家族化が進み、夫婦単位の生活が重要となる今後は、性交障害は今まで以上に重要な治療対象となる。粘膜萎縮はエストロゲンレセプターを有する膀胱三角部や尿道にも起こり、膀胱炎や尿道炎を起こしやすくなる。これらの症状に対してはホルモン補充療法（HRT）は短期間に著効を呈する。

（つづく）

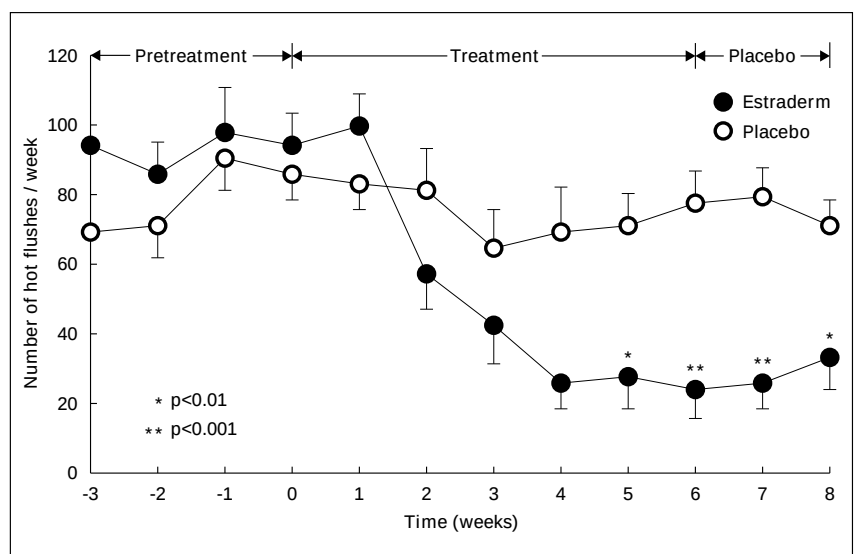


図1: Estradiol含有テープ剤およびPlaceboテープ使用時の主観的hot flush発生数の変化（Haas, 1988より）

宮沢賢治を訪ねて

青木 新門

宮沢賢治ブームである。

賢治、賢治とあまりに騒がしいので、何事が起きたのかと、岩手へ車を走らせた。

こうした軽率な野次馬的行動は、私の生来の癖である。最近特に思いつきで行動することが多くなった。

北上、花巻と、目的もなく車を走らせていたら、あちこちに緑の旗が立っているのに気がついた。最初のうちは、宅地住宅の展示会場の旗だろうと思って見過ごしていたが、やがて「宮沢賢治生誕百年」と染め抜かれた幟旗だと分かった。

市街地から外れた田んぼの畦道にまで立てられている。賢治が常に気にしていた稲の生育も上々の水田をバックに、炎天下の陽炎の中、緑の旗が揺らめいていた。

とにかく今年の岩手の夏は、宮沢賢治一色なのである。

大沢温泉

なぜ、こんなに宮沢賢治が騒がれるのだろうか。賢治が生きている間、誰も彼を認めようとしなかったのに。

特に当地地元では、少年時代は「石っこ賢ちゃん」と指され、やがて「気違い賢さん」と陰口され、宮沢家にも、とんだうつけが生まれたものよ、と陰でささやかれていたのである。

異常なまでに賢治を愛した篤信家の父親と慈母観音のような母親がいなかったら、石川啄木が石もて郷里を追われたように、とっくに追い出されていたかもしれないのだ。

実際賢治の38歳の生涯で、父母を頼らず自分の力だけで生活したのは、家出上京した8ヵ月だけである。

確かにむきになって農耕生活を2年間しているが、地元であるため宮沢家の力が陰となり日向となって働いていたことであろう。

また、生前唯一出版された詩集『春と修羅』も、ほんの一部の人（草野心平や高村光太郎など）に高く評価されたが、一般の読者からは全く無視され、童話集『注文の多い料理店』も、全くといっていいほど売れなかったのである。

そんな宮沢賢治が、今日これほどもてはやされるのは、地球環境の変化にも相当する何かが起こったからに違いない。

そんなことを考えながら車を走らせていたら、道を間違えてしまい、花巻温泉へ向かっていたつもりだったのに、大沢温泉へ来ていた。賢治も少年の日に、父政次郎に連れられて度々訪れたという山間の一軒宿である。

引き返すのも面倒と、部屋が空いていないか尋ねると、満室だと言う。どんな部屋でもいいかと粘ってみたら、旧館のクーラーのない部屋なら空いていると言う。

新館は立派だが、旧館はひどく古そうである。とにかく宿がとれて、ほっとした。

廊下に、暁烏敏師や父政次郎や10歳の賢治などの顔が見えるセピア色の集合写真が掛けてあった。額の下に筆字で「明治40年花巻仏教夏期講習会」とある。

部屋に案内されて、窓を開けると、目の前を谷川が流れていた。クーラーなどなぜ必要なのだ。願ってもない部屋に泊まれたものだと、うれしくなった。

川原に突き出た露店風呂から戻ると、しばらく窓際に座って、谷川の流れを見ていた。

突然、何か黒いものが、夕闇を横切った。羽音が鋭かった。よだかだろうと思った。よだかは鷹のように風を切って飛ぶという。私はカバンの中から宮沢賢治全集（ちくま文庫）を取り出し、『よだかの星』を開いた。

よだかの星

〈よだかは、実にみにくい鳥です〉と始まる『よだかの星』のよだかは、顔は味噌をつけたように醜く、くちばしは平たくて耳までさけている。足は、まるでよぼよぼで一間とも歩けない。そんなよだかを他の鳥たちは、差別し軽蔑し、徹底的にいじめた。

鷹などは、自分と名が似ているからと、改名しろ、改名しなければ殺す時まで言っておどす。

よだかは、口を開けて飛ぶと、口の中へ羽虫や甲虫が入ってくる。その度に罪悪感にさいなまれる。

「ああ、つらい、つらい、僕はもう虫を食えないで餓えて死のう。いやその前に、もう鷹が僕を殺すだろう。いやその前に、僕は遠くの空の向ふにいつてしまはう」と決意する。そして太陽やオリオン星や大犬座、大熊座に近づこうと願うが、みんな断られてしまう。



青木 新門 / あおき・しんもん

1937年、富山県生まれ。早稲田大学中退。作家、詩人、冠婚葬祭を扱うオークス株式会社取締役相談役。著書に、『納棺夫日記』（第7回地方出版文化功労賞受賞）、『雪原』（桂書房）、『木漏れ日の風景』（北日本新聞社）など。

よだかは、力を落として羽を閉じて地に落ちて行き、着地寸前のところで、のろしのように空へ舞い上がり、高く高く死力をつくして上昇して行く。寒さや霜が剣のようによだかを刺し、羽根はしびれ、よだかは力尽きる。その瞬間、よだかは自分のからだか燐の火のように青い美しい光となって燃えているのを見る。

そしてカシオピア座の横で、よだかの星はいつまでも燃え続け、今も燃えている。

そんな童話である。私は、今度再び読んでこのよだかは、当時の賢治自身だったのだと思った。

青い美しい光

この作品は大正10年、真宗信者であった父に法華經への改宗を迫り、果たせず、家出上京した頃のもので、生前未発表のものである。

「自分は仏教を知らなかったら、三井、三菱くらいの財産をなしていただろう」と豪語する資産家でもあった父。しかしその資産は東北農民の犠牲の上に築かれたものであった。

賢治は、その宮沢家の後継者と決められた悲しい業を背負っていた。

よだかが弟の川せみに、遠いところへ行くと決意を言うと、
「兄さん、行っちゃいけませんよ」という川せみに
「それはね、どうも仕方がないのだ、もう今日は何も言わないで呉れ、
そしてお前もね、どうしてもとらなければならぬ時のほかは
いたずらにお魚を取ったりしないようにして呉れ、
ね、さようなら」
と、賢治はよだかに言わせている。



宮沢家の家業は、結局いたずらに魚を取る業と賢治には思え、鷹のような父との確執に破れ、家出上京するのである。

そして、その突破口を求め、国会会の門を叩く。しかし、それも門前で丁重に断られ、応対した高知尾智燿氏に

「出家して僧侶となり仏道に専注するが唯一の道ではない。農家は鋤鋤をもって、商人はソロパンをもって、各々その人に最も適した道において法華経を身によみ、世に弘むるというのが、末法における法華経の正しい修行のあり方である。

詩歌文学を得意とするならば、その詩歌文学の上に純粹の信仰がにじみ出るようにしなければならぬ」と言われ、あの有名な『雨ニモ負ケズ』の手帳に〈高知尾氏ノ勸メニヨリ、法華文学ノ創作〉と書き留め、東京在住8カ月の間に、膨大な作品を一気に書き上げるのである。

それはあたかも、よだかが挫折して、着地寸前のところで、のろしのように空へ舞上がり、高く高く死力をつくして上昇したように、自己を燃焼させるのである。

そしてやがて、燐光のように燃え続け、青い美しい光となって輝く。

この光こそが、いかなる時代にあっても、人を引き付けてやまない永遠の光なのである。

しかし、賢治を神格化したり、わいわい騒ぎすぎると見えなくなる光でもあるのだ。

自然との共生

深夜になっていた。みんな休んだのか部屋部屋の明かりが消え、山の稜線がぼんやりと見えるようになった。星が一つ光って見える。

眠れないまま、童話集を読み続けた。

『狼森と朧森、盗森』を読んでいて、ハッと思った。賢治ブームの秘密がここにもあるように思えた。

賢治はこの童話の中で、未開の森の中へ4人の百姓がやってきて、そこに新しい田畑を開き、住もうとすると



「ここへ畑起こしていいかあ」

「いいぞお」森が一斉にこたえました。

みんな又叫びました。

「ここに家建ててもいいかあ」

「ようし」森は一ぺんにこたえました。

みんなまた声をそろえてたずねました。

「ここで火たいてもいいかあ」

「いいぞお」森は一ぺんにこたえました。

みんなまた叫びました

「すこし木貰っていいかあ」

「ようし」森は一斉にこたえました。

なんというやさしさなのだろう。

自然との共生の姿が、ほのぼのと描かれている。

地球環境の破壊が問題とされている今日、心ある人々の共感を呼ぶだろう。

「どうしてもとらなければならない時のほかは、いたずらにお魚を取らないようにして呉れ、ね」というよだかの言葉に、今日の我々はハッとさせられる。

時には、白いご飯のおにぎりが、まぶしい季節もあったが、いつの間にか世界中の食べ物や森の木を買い占めて、快楽や快適を指向している。

人間中心主義に裏打ちされた近代科学を頑なに信じ、自我の確立と欲望の充足こそが幸せに至る道だと信じてきたのである。

しかし、わが国高度成長経済もバブル崩壊と共に低迷し、高齢化社会の到来や地球環境の変化などで、人々の意識にも変化が生じてきているのである。特に生と死を分けて考える二元論では解決できない問題（脳死や安楽死や差別やいじめの問題など）が、人々の心を不安にしている。

そんな不安が、賢治の光を求めるのである。

すすぎが光り、

川原の小石は水晶のように輝き、

川は光の帯となって流れている

樹や電柱や星も燐光のように燃えている

そんな全てが光に包まれた世界を、銀河鉄道が走ってゆく

賢治が車窓から大声で叫んでいる



「世界ぜんたい幸福にならないうちは
個人の幸福はあり得ない」

＊ ＊

人の声がした。朝食の案内だった。いつの間にか眠っていたのだ。

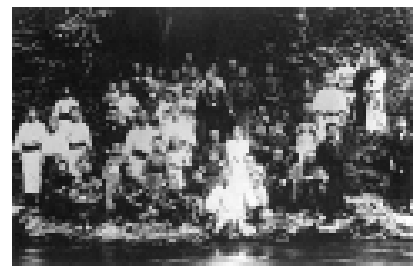
大沢温泉を後にしながら、富山から、700キロも車でやって来て、イーハトブ童話集を読んだだけだった。けどなんだかとても愉快的気持ちになっていた。

帰路立ち寄った宮沢賢治記念館は、人人人であふれていた。コーヒーでもと、注文の多い料理店『山猫亭』を覗くと満席で、しばらく入口に立っていたが、カツカレーのどんかつをフォークに突き刺して大きな口に入れたお婆さんの眼が山猫のように光ったので、出てきてしまった。

車に乗ろうとした時、入道雲がぐらっと傾いて光った。

きっと賢治が笑ったのだろう。

青木新門著『納棺夫日記』が文庫になりました。これを記念して、Vitalité読者20名に文春文庫版『納棺夫日記』（サイン入り）をさしあげます。ご希望のかたは、添付の葉書でお申し込み下さい。



真実一路

奥村 一郎

前号、「ある挑み—自然消滅—」の流れをうけて、さらに、その核心に迫る話題をとりあげてみたい。

1 托鉢と荷車

いくつかの事柄が重なりあった話題なので、紙面の都合上要約させていただく。

かなり昔のことになるが、機峰駿烈な禪風で知られた京都の禾山禪師のもとで雲水修行をしていたひとりの禅僧にかかわる逸話である。六人の雲水とともに老師が托鉢に出ておられたある日のこと、坂道にかかったところで、重い荷物を山ほど積んだ荷車を引いて急な坂を登りあぐねている人に会った。ひとりの雲水が思わずすうと托鉢の列から出て車を押してやった。その時、フトそれに気づかれた禾山老師は、すぐに托鉢をやめて、ひとりでさっさと寺に帰ってしまわれた。そして、直ちにその雲水に下山を命じられた。下山というのは、禅門における最も厳しい追放の罰である。カトリック教会での破門のようなもの。車を押して人助けをしたのに、どうして、そのような厳罰が与えられなくてはならないのか、他の道友たちも分からず、深く同情して、せめてその理由だけでもと老師に懇願した。老師は毅然として言われた。

修行の身であるものが、人の車に気をひかれるようではどうする。山門から叩きだせ。

しかし、その雲水もさるもの、山門の脇に坐り通して後、やっと独参のゆるしだけ、いただいたという。

「己事究明」の「専一行」に徹する禅修行の面目躍如たるエピソードである。

さて、京都の花園大学の西村恵信教授が、米国留学中、禅修行の特色を見事にあらわす話題としてキリスト教の一派であるクエーカーの信者たちにこのエピソードを伝えた。すると、全く期待はずれ。異口同音に、禅修行を手厳しく批判してきたため、西村禪師は弁解のすべもなく戸惑ってしまった。困っている人を助けることこそ、宗教者のとるべき態度であり、禅の修行精神は、全く非宗教的、非人間的であると、

クエーカーの人に徹底的に叩かれた。まさに、「禅キ衝突」の正念場。

ところで、この話にはさらに第三幕がつづく。世界的に著名な、故鈴木大拙博士が、しばらく帰国されたある日のこと、先生を囲む食卓で、西村教授が、米国での例の痛い体験についての思い出を話された。そのとき、大拙先生は、いつのまにか目をふせ、涙をおさえるようにして言われた。

「いや、そんな筈はない。いくらキリスト教徒でも、この老師の慈悲が分かんわけではない」と、西村教授の話を強く否定された。

ここで、西村教授はまたさらに当惑。そこまでの話のいきさつを、「老博士の涙」と題して、教授は『鈴木大拙全集』の紹介文の中で書いておられる。

遠いある処での、ある人の、全く目立たない、数分の小さな出来事が、水面に投げられた石がつくりだす波紋のように、人から人へと語りつがれて、今は、カトリックの修道者のわたしにまで及ぶ興味深い、連続ドラマのような話である。西村教授が、「とっておきの話」と前置きして話してくださったのもうなずける。教授は、さらにコメントする。

「禅者の立場からする慈悲は、暖かさや優しさと思わせる他者依存の甘さではなく、非情の情、突き放しの精神であり、自律の要求であり、与えるものではなくて、根本所有を自覚させるものである」と。

宗教の対話というよりは、「対決」ともいえるこの貴重なエピソードは、わたしにとっても、「とっておきの話」になった。「愛（アガペー）」を生命とするキリスト教に真っ向から対立する禅的修行態度は、確かに、どのキリスト者にとっても、クエーカーの信者と同じように、全く不可解なもの。否、非難されるべきものと言うしかない。

この衝撃は、禅キ両者を否応なく分裂させ、対話や交流の道を全く塞いでしまうものなのだろうか？隣人愛、人類愛を説く聖書の根底にあるものは何なのだろうか？

2 マルタとマリア (ルカ福音書10章38～42節)



奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会・カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

一必要なものはただ一つ—

イエスがある村に入られると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタはいろいろのもてなしのため忙しく立ち働いていた。それで、イエスに近寄って言った。「主よ、わたしの妹はわたし一人にもてなしをさせていますが、何とも思われませんか。手伝うように言いつけてください」と言った。すると、主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに心を配り、思い煩っている。しかし必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを彼女から取りあげてはならない」。

この逸話も、一寒村ベタニヤでの、ほんの小さな出来事である。上記の「托鉢と荷車」の話にも似ている。細部についての解釈はまちまちであるが、「必要なただ一つのもの」というのは、キリスト自身にほかならない。さらにいえば、「いつ、どこでも、キリストとともにいること」である。その死の直前にキリストは祈る。「父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を彼らに見せるためです」（ヨハネ17, 24）。

禅者が「己事究明」の専一行に全身全霊を投入することは、キリスト者が、いつどこでもキリストとともに死に、キリストと共に復活する生き方にその全存在を賭ける殉教にも似ている。キリスト教の本質は、「教え」でも、いわゆる「宗教」でもない。たえず、キリストと共にある現実を生きることによって死を超えることにある。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたたちと共にいる」という、マタイ福音書を結ぶキリストの言葉には千金の重みがある。

キリストに召された弟子のひとりが、「主よ、まず、わたしの父を葬らせに行かせてください」というと、「わたしに従え。死者は死者をして葬らせよ」と、キリストは命ずる(マタイ8:21~22)。さらにもうひとりが、「主よ、わたしはあなたに従います。しかし、まず、家族にいとまごいをさせてください」と言えば、「鋤に手をつけてから、後ろをふり向く者は、神の国にふさわしくない」とも言い切るキリスト。(ルカ9:61~62)

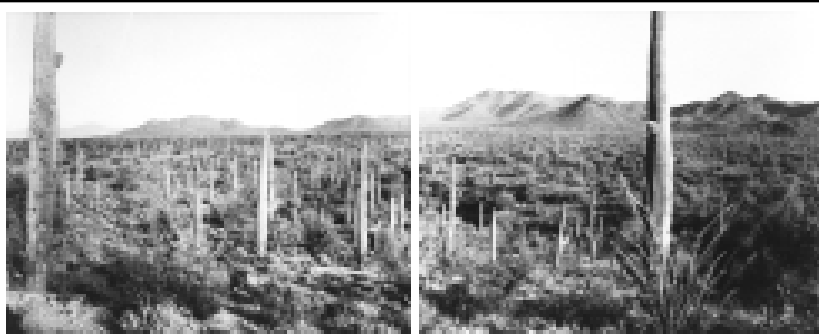
イエスが愛した二人の姉妹の女性らしいトラブルの場面では、優しく姉マルタを戒めながら、きっぱりとキリストは言う。「マリアはよい方を選んだ。それを彼女からとりあげてはならない」

禾山老師は、小さな自己満足にもなりかねない目の前の人助けよりは、すべての人の救いがかかっている「己事究明」の禅修行に徹することの重要性を説く。キリストは、いつ、どこにあっても、また、何をしても、キリストと共にあることの至上の価値を教えようとする。いずれも、人間の常識の枠を破り、凡俗な良識に挑む。徹底した脱自の境地なくして、真の慈悲行はないことを禅者は知っている。そこでは、ガンよりも悪質な我執への挑戦が、何よりもまず求められる。安易な慈善を拒絶することは、上記に見るキリストの姿勢にも躍如として現れている。我欲の肥満児となってしまった現代人の死に至る病を癒やす力は、絶えまない自己放棄による自己超越の道しかないという教えがそこにある。

わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者はそれを失う。わたしのために、自分の命を失うものは、それを救う。

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失えば、何の得があろうか。自分の命を買いもどすのに、どんな代価が支払えようか。

(マタイ福音書16章24~26節、マルコ福音書8章34~36節、ルカ福音書9章23~25節)



Kozo Miyoshi CACTI Landscapes

三好耕三

10.1 tue - 11.15 fri, 1996

10.11 fri = 臨時休館

フォト・ギャラリー・インターナショナル

月一 金 11:00 am — 7:00 pm

土, 日, 祝 休館

phone 03 3501 9123

P.G.I. 芝浦

吉田友彦 作品展 Tomohiko Yoshida
「砂山の砂 : chrome yellow」

10.8 (Tue) — 11.8 (Fri) 1996

月一 土 11:00 am — 6:00 pm

第2, 第4土曜日, 日, 祝 休館

10.11 (金) 臨時休館

phone 03 3455 7827

PHOTO GALLERY
INTERNATIONAL

人類愛と芸術に生きた ロマン・ロラン（II）

島野 盛郎

ブルゴーニュを愛した作家たち（4）

19世紀の終わりから20世紀前半にかけて世界文学史上に輝かしい金字塔を樹立したのはロマン・ロラン（Romain Rolland）であった。

ノーベル文学賞を受賞した『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』は、いわゆる大河小説の先駆をなした作品であり、歴史の意識と社会的関心を文学のなかに導入する画期的な作品となった。

しかし、ロランの真価はこの二つの作品によってのみ評価されるべきではない。『ペートル・ヴェンの生涯』（1903）にはじまる数々の伝記、『ダントン』（1898）、『7月14日』（1902）、『愛と死の戯れ』（1925）に代表される戯曲、『クレランボー』（1920）、『ピエールとリュース』（1920）などの反戦小説、陽気なブルゴーニュ魂を描いた『コラ・ブルニョン』（1919）、すぐれた音楽評論などなど不朽の作品がほかにも多数残っているからである。

元来、体質的には音楽家、素質においては歴史家、その感情は詩人であるといわれる偉大なロマン・ロランを前回に続いて紹介することとする。

67歳で再婚

ロランは第二の長編『魅せられたる魂』をスイスで11年の年月をかけて1933年に書き上げた。すでに67歳になっていた。だが、その翌1934年には、亡命ロシア人マリー・クーダチェワと二度目の結婚をした。彼女とはその数年前から文通をしていた。ロランの作品に傾倒している彼女の純粋な手紙はロランを感動させ続け、ついに結ばれたのである。彼女は結婚後もロランに誠実な愛を捧げるとともに、彼の仕事に助力を惜しまなかった。かくて長い孤独の生活から解放されたロランに喜びと力がよみがえってきた。この頃は人民戦線運動の絶頂期でもあり、ロランにとってはローマ留学時代とともに幸福な季節であった。

こうしているうち、長年住んでいたスイスから愛する祖国フランスで余生を送りたい気持ちになっていった。

ナチズムやファシズムが中立国スイスをさええ侵しはじめ、「精神の自由な空気がしだいに吸えなくなってきた」からでもあった。

1938年、ブルゴーニュの生まれ故郷クラムシ

ーに近いヴェズレーに居を構えた。

ヴェズレーはその昔、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラに通じる巡礼の道の基点の一つである。マドレーヌ寺院を中心に古い造りの家々が寄り添うように建ち並んだ丘陵の美しい町である。今も中世の雰囲気静かに伝えており、ロランが住んだ家も残っている。4年前、筆者はヴェズレーのロランの家を訪ねたとき、ここが偉大な魂が長い生涯を終えたところかとの感慨で胸が一杯になった（写真）。

ロランがこの家に住んだのは、7年間である。ここに移った翌1939年、第二次世界大戦が勃発し、まもなくヴェズレーの平和な丘もドイツ軍に占領された。彼は発言の自由を奪われたので、静かにペートル・ヴェン研究や親友シャルル・ペギーの伝記を書き進めた。

本来ならロランは頑強にナチ・ドイツに抵抗してきたのだから、逮捕はまぬがられないはずであった。奇跡的に逮捕をまぬがれたのは、ロランの作品を愛読した一ドイツ将校の配慮があったからだという。

ヴェズレーに住むようになってから、ロランはしだいに体のあちこちが悪くなっていった。心臓が弱り、視力が衰え、息切れのため歩くのも困難なほどになった。しかし、「光が与えられている間は」と執筆に余念がなかった。レジスタンスの若者たちからも目を離さなかった。この頃の日記に「私は人類の理想に忠実であり続けた。たとえ私個人が倒れても、この理想は再び立ち上がるであろう」と書き綴っている。

1944年8月下旬、パリは解放され、全フランスに自由と歓喜がよみがえった。ロランは同年11月7日、病気の診断を受けにパリに行った。そしてソビエト大使館の革命記念祝賀会に出席することができた。ヴェズレーに戻るとレジスタンスの犠牲者追悼会（12月9日）のためのメッセージを送った。それが最後の文章となった。それから三週間目の12月30日、ロランは78年の人生を静かに閉じたからである。

彼の偉大な遺業をしのぶ人びとは、彼の遺骸をパリのパンテオン（英雄・偉人をまつた寺院）に収めようとしたが、彼の遺言によって生まれ故郷クラムシに近いブレーブの、祖先が眠っているささやかな墓地の片隅に葬られた。つまりブルゴーニュに生まれ、ブルゴーニュに眠っ



1912年頃のロマン・ロラン（パリ・モンパルナスにて）

たのである。

ロランがブルゴーニュを描いた作品に『コラ・ブルニョン』（1919）がある。これは昔からのブルゴーニュの人びと特有の楽観主義を好意にみちて綴ったものである。常に悲劇的なあるいは英雄的なテーマを扱っている彼の中では、まさに異色であるが、ロランの魂の奥底には祖先伝来のブルゴーニュ魂がひそんでいることを表現している。

シュテファン・ツヴァイクはこの作品を「ロマン・ロランの諧謔風の傑作」と評している。『ジャン・クリストフ』という大著完成に疲れたロランの心から、ほっと流れ出た故郷を想う自然の音楽とでもいうべきものである。なかで彼はクラムシーをつぎのように誇らかに歌っている。

“クラムシーの町、名高い町、
川のほとりにみこしをすえて、
一方にはよいぶどう酒、
他方には牧場、

まわりの畑だけで一国の値打ちだ”

またつぎのようにも述べている。

“美しい反映となだらかな丘の町・・・
お前の回りに、巢の藁のように編まれて、
耕やかされた丘の斜面のやさしげな線が巻
きついている。
樹々の茂る山々の長々とのびる波が、
やわらかに起伏して、
はるか遠くは青味がかり・・・
まるで海のようなだ。・・・
潮の波がしらの上、
はるかに遠く、ヴェズレーのマドレーヌ寺院が、
その帆柱をそびえ立たせている。
そしてすぐ近く、
うねうねしたヨンヌ川の曲がり角には、
バセルヴィルの大岩が茂みのあいだに、
その猪の牙を突き出している”

すぐれた伝記作家

最後にロマン・ロランの伝記について触れることにする。1903年、ロランは親友シャルル・ペギーの編集する『半月手帳』に『ペートル・ヴェ



ヴェズレーの鳥観

ンの生涯』を発表した。これが伝記の第一作で、以後『ミケランジェロの生涯』、『トルストイの生涯』、『マハトマ・ガンジー』、『ラマクリシナの生涯』、『ヴィヴェカーナンダの生涯』、『シャルル・ペギー』などを発表している。ペートーヴェン、ミケランジェロ、トルストイの伝記がロランの三大伝記といわれているが、他の諸作もそれらにまさるとも劣らない水準にある。いずれも人類の苦悩を背負いながら真実のために苦闘した精神的英雄に対するロランの感激の賛歌である。ロランはこれら精神的英雄の息吹きを吸って、物質的な世界の息苦しさからのがれ出ようと企てたのである。

なかでもロランのペートーヴェンに対する尊敬と傾倒は熱烈なものであった。少年時代からペートーヴェンこそは一生を通じて彼の魂の師であった。彼がいくたびかの生の虚無感におそわれた危機に、心の内部に無限の希望の火をともしてくれたものは、ペートーヴェンの音楽であった。こういっている。

「親愛なペートーヴェン！彼の芸術家としての偉大さについては、すでに多くの人びとがそれ



ブレーヴの墓地で

を賛賞した。けれども彼は音楽家中の第一人者であるよりも、さらにはるかに以上のものである。彼は近代芸術の中で最も雄々しい力である。彼は悩み戦っている人びとの最大最善の友である。……そしてわれわれが悪徳と道学とのいずれの側にもある凡俗さに抗しての果てのない、効力の見えぬ戦いのために疲れるときに、このペートーヴェンの意志と信仰との大海にひたることは、いいがたい幸せの賜ものである。彼から勇気と、戦い努力することの幸福と、そして自己の内奥に神を感じていることの酔い心地とが感染して来るのである」（『ペートーヴェンの生涯』片山敏彦訳、岩波文庫より）

若い頃から耳を患い、家庭内のトラブルに悩まされながら、強靱な精神力と不屈の闘志で楽聖となった。ロランの研究は見事にこの楽聖の奥深くまで分析し、考証している。

ロマン・ロランの諸作品、とりわけ『ジャン・クリストフ』はペートーヴェンの存在なくして描くことのできないものであった。ロランの作品は、従来、フランスよりもむしろ国外で熱心に読まれる面があった。フランスでは平和主義を標榜する行動的な知識人として注目される面があったからである。

しかし、いまではフランスを含めた世界中に文豪としての評価を不動にしている。ロランの作品は偉大なヒューマニストの信仰の告白であり、人間信頼の賛歌といえよう。

島野 盛郎 / しまの・もりお

1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター。「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいる―越路吹雪物語』（白水社）、『食を創造した男たち』（ダイヤモンド社）などがある。



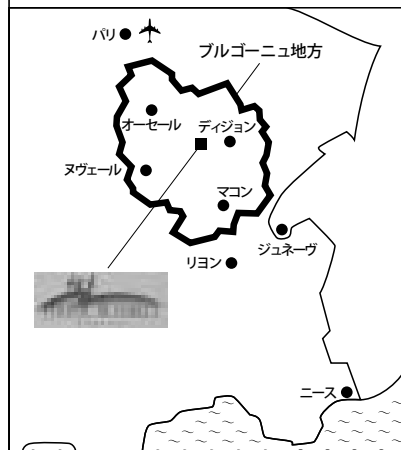
ロマン・ロランの家の前に立つ筆者



Château de Chailly / シヤトー・ドウ・シャイイ

ブルゴーニュへようこそ。

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や、小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。



お問い合わせ↓

(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087